

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

指先の触覚から看護の意味と人間性を考える試み：
プチプチから始めるタッチの初年次教育

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2020-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 守山, 正樹, 鈴木, 清史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000675

著作権は本学に帰属する。

報告

指先の触覚から看護の意味と人間性を考える試み； プチプチから始めるタッチの初年次教育

守山 正樹¹⁾ 鈴木 清史¹⁾

看護師にとって手の働きは重要であり、触れる技術としてのタッチは看護の基本技術と位置付けられる。しかし看護の初学者に対し、技術としてのタッチの教育を急ぐ前に、タッチの基礎となる「手で対象に触れ感じ考えることの意味」をどのように教育したらよいただろうか。国内外の文献を検索したが、適切な先行研究が見当たらなかった。そこで看護大学の初年次教育用に新プログラムを開発した。

開発に当たっては、筆者が1990年代から医学生を対象に行ってきた視覚障害体験実習の1プログラム「身の回りの物体に触れて考える」を出発点とした。少人数の設定では、学生は様々な物体（複雑な日用品から人間の手肌まで）に触れて考えることができる。しかしこの設定を大教室に適用するのは難しい。大教室で実行するためには工夫が必要である。飽きることなく触れ続けられ、様々なことを考えられる物体は何だろうか？ 学生がその指先から“人間性”や“看護の概念”に至るまで、思考を拓けることは可能だろうか？

試行錯誤の結果、気泡緩衝材（通称プチプチ）に注目した。プチプチは独特なアフォーダンスを持っている。通常はプチプチを渡すと学生はすぐにそれを潰し始める。しかし「なぜ潰すのか？それを命と考へても潰せるか？」などの問いを投げかけると、学生は触れることの意味を考え始める。プチプチにナラティブな問いかけを組み合わせ、新教育プログラムとした。2019年6月、学生120名に対して新プログラムを実施した。学生はプチプチを教材として受入れ、“触れることの意味”から“看護と人間性”に至るまで、自律的に思考を発展させたことが観察された。

キーワード：看護、初年次教育、タッチの意味、プチプチ、触覚

I はじめに、看護師の仕事と手、これまでの見方

1. 発端の問題提起

本学の1年生に対し、基礎力ゼミナールIの時間に問題提起をする機会をいただいた。ディプロマポリシーでの位置づけは「大学生として学ぶための導入科目であり、すべての科目の基礎となる」である。そこで本学のキャッチフレーズに迫れるような授業を考え始めた。

本学のキャッチフレーズは「ひとりを看る目、その目を世界へ」である。ここで「目」を「視覚器」と理解するなら「看る」は「見る・観る・視る」と記した方が分かりやすい。他方、本学が看護大学であることを考えると「看る」と記すのは当然である。しかし「看る・診る」を実現する器官としては「目」だけでは十分とは言えない。少なくとも「手」の存在は考慮する必要がある。よって「ひとりを看る目、

その目を世界へ」は本来「ひとりを看る手、その手を世界へ」を含意すると考えられる。その含意を現実化できる授業をめざすことにした。

看護にとって手の働きは大切である。では看護師がその手の大切さに気づいたのは、歴史的には、いつ頃、どのようにしてだろうか。また手の大切さへの気づきを、看護を学び始めたばかりの現代の学習者に伝えるにはどうしたら良いだろうか。スマートフォンにタッチすることが生活の中心になっているように思われる現代の学習者が、手の大切さに目覚めるためには、どのような教育的な働きかけが有効だろうか。

2. 最初に出会ったミードの文献

看護師の手の大切さを明示した文献として、最初に出会ったのは米国の文化人類学者マーガレット・ミードの講演記録¹⁾である。ミードは米国看護協会での1956年の講演で看護師の仕事の本質を以下

1) 日本赤十字九州国際看護大学

のように述べた：「私は今までいろいろな人たちに話をしてまいりましたが、わが国アメリカのなかでも、皆さんのような聴き手にお話をするのは、はじめてです。というのは、皆さんのうちのどのかたも生まれたばかりの赤子をわが手に抱きとったことがあり、また今しがた亡くなった方の顔をそっと閉じたことがおありになる—いわばこうしたなまなましい生と死という現実が、ある意味では、毎日毎日の経験となっている方々は皆さん方だけであるからです。」

さらに同講演でミードは以下のように続けた¹⁾：「『いたわり』ということばを聞くと、私たちは苦しんでいる人・おびえている人・悲しみに打ちひしがれている人の肩にやさしく手をおいている人の姿をいつも思い浮かべてきました。そして、ここにこそ、看護の働きのもう一つの重要な側面があると私は考えます。私たちは、自分の手の持つ働きを忘れてしまっているのではないのでしょうか。昔とくらべると、私たちのあいだには自分の手を使って仕事をする人が少なくなりました。彫刻家や画家や建築士などのひとびとの数は減っています。そうした傾向のなかで、皆さんは、ひとりの専門職業にたずさわる者として、皆さんのその両手と皆さんの人間性とを用いて仕事をなさっているのです。絵具や粘土や楽器やメスなどを用いるのではなく、皆さんの暖かい洞察力のある人間欲求の理解がすぐに皆さんの両手の働きとなってあらわれるということをおこなっているのです。」

上記のミードの講演は大変に印象深いものである。では看護師自身は「看護師の手の大切さ」をどのように認識しているのだろうか。

3. 看護師は手をどう位置付けてきたか

1) 現代からの問題提起

川嶋みどりは2008年の講演で以下のように述べた²⁾：「人間にとってあらゆる営みの基本である手、看護師はその手によって患者のあらゆる問題に対処できるはずですが、目的によって、支え、抱きかかえ、握り、はさみ、触れ、さすり、つかみ、揉むなどなど。この手の温度は一定ですし、人と人との関りを生み出す有力なツールにもなります」。この川嶋の指摘は半世紀以上前のミードの講演とも照応する。看護師にとって手が大切であることは、今も変わらぬ事実と考えられる。しかし同じ講演で川嶋は以下

のようにも述べている²⁾：「『息苦しさ』を訴える患者の顔も様子も観察せず、指先に挟んだサチュレーションモニターのデジタル値のみで『息苦しくないはず』とか『大丈夫』と言うのみ。ディスプレイに集中する目はあっても、患者を診る目は曇っていないでしょうか。・・・」この部分からは「手の大切さ」が危機的な状況にある現状がうかがえる。

2) 19世紀、原点としてのナイチンゲール

近代的な看護の原点であるナイチンゲールは、手やタッチをどのように意識していただろうか。筆者はナイチンゲールの著書『Notes on Nursing』³⁾を取り上げ、Adobe Acrobatの検索機能を用いてPDF化された著書中の単語の使用状況を調べてみた。その結果、手(hand)は16回使われていたが「On the other hand(9回)」「at hand(2回)」など慣用表現としての使用が中心であり、体の部位としての使用は5回にとどまり、また手で触れることの意味は特に言及されていなかった。タッチ(touch)は3回使われていたが、手で触れる行為を示す以上の言及は認められなかった。手の大切さは言うまでもないことであろうが、ナイチンゲールは手の大切さに具体的に踏み込んで述べることはしなかった、と考えられる。

3) 1940年代からの手の捉え方

ミードが講演した時代とそれ以後、20世紀の看護師は手の大切さをどのように捉えていたのかを知ろうと文献検索を行った。1940年以降であればPubMed & Cinahlが利用できる。「手、タッチ(hand or touch) / 看護(nurse or nursing)」をキーワードとして1940～50年代の文献を検索したところ、題名に手(hand)を含む3文献^{4,5,6)}およびタッチ(touch)を含む1文献⁷⁾が見つかった。しかし手の大切さや手の用い方について、具体的な記述は確認できなかった。

4) 20世紀後半における「手」の文献

20世紀の後半になるとタッチを扱った文献が増え、文献レビューも現れる^{8,9)}。しかしタッチという用語を用いた場合は、コミュニケーション促進、援助、ケアなど、看護技術の目的に応じた「熟練した手の使い方」としての捉え方が中心となる。タッチが特定の看護技術に分化する前、文化人類学者

ミードが20世紀中期の看護師に認めていた「洞察力のある人間欲求の理解が手の働きとなってあらわれる」ような手の基本的・根源的な用い方は、どうなっているのだろうか。

看護技術として教育される前に、人間として生まれつき備えているとも考えられる手の働きに着目し、そこから看護の初年次教育を出発させられないだろうか。

4. 英語圏の教科書にみる看護師の手の位置付け

文献から教科書に目を転じ、米国を中心に使用されている2冊の教科書で「手・タッチ」の記述を調べた。

1) 教科書『Fundamentals of Nursing』¹⁰⁾ の記述.

「タッチ：触覚が、非言語的コミュニケーションの一形態として真剣に研究されたのは、1960年代以降に過ぎない。」(同教科書 p451、筆者による試訳)

2) 教科書『Holistic Nursing』¹¹⁾ の記述.

「1600年代のピューリタン(補足：清教徒＝16世紀までの英国国教会に代表されるようなキリスト教から、カトリック的な要素を取り去り、カルバンの教会改革に従って徹底した改革をしようとしたプロテスタントの総称)の文化の台頭、さらに原始的な癒しの実践が現代の科学的医学へと移行するまで、シャーマンと伝統的な実務家(補足：医療の実務家、看護師や医師も含む)の両方が広くタッチを用いていた。ピューリタン文化はタッチを性的接触と同一視し、ヒトのキリスト教的な原罪と関連付けた。その後、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ヘルスケアは、迷信や原始的な癒しとの関連性から離脱し、科学的医学へと向かった。タッチが持つ原始的な癒しとの関連性や、当時の支配的なピューリタン倫理のために、不必要なタッチは全て推奨されなかった。その結果、1950年代にその効果についての研究が開始されるまで、治療的介入としてのタッチは米国の医療において未発達のままであった。」(同教科書 p645、筆者による試訳)

これらの教科書の記述より、看護師が看護に必須の「手で触れる行為」を無意識的・日常的に用いていた一方で、17世紀以後の欧米におけるピューリタン的な文化背景のもとで「手で触れる行為」を意識的に行うことは、比較的最近まで避けられていた

事情がうかがえる。

5. 現代の看護教育で看護師の手はどう位置付けられているか?

不必要なタッチが全て推奨されなかった時代を経たあと、今日ではどうなのだろうか。かつてピューリタン的な制約が強かった欧米において、現代ではピューリタン的な文化的制約は薄れ、医療・看護の行為が科学的なエビデンスで評価される傾向が強まっている。特にタッチは、欧米において、科学的なエビデンスが1970年以降に蓄積され始め、様々な目的を持ったタッチが「触れる技術」として教育される時代になった。しかし「触れる技術」の手前であってしかるべき「触れる基本の教育」については適切な先行研究が見当たらなかった。

では日本の状況はどうだろうか。「看護 & (触覚 or タッチ) & 教育」をキーワードとして医中誌 Web で検索した。1980年代末から現在までで242件がヒットしたが、欧米と同様にタッチを「触れる技術」と位置付けた報告が大多数であり、看護の初学者を対象としてタッチの教育を扱った報告は3件が認められた^{12, 13, 14)}。しかしタッチの技術を研究の最初に定義する^{12, 13)}、学習者は教員の行うタッチの模倣を求められる¹⁴⁾などであり、技術に至る前の「触れる行為」の意味を問う試みは認められなかった。

これまで研究がないとしても、わが国の看護教育カリキュラムでは「手、タッチ」はどう扱われているだろうか。文部科学省による「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて、2002」¹⁵⁾には「看護基本技術」の学習項目中の安楽確保技術として「リラクゼーション、指圧、マッサージ」が含まれているが「手」や「タッチ」は登場しない。

では「看護学教育モデル・コア・カリキュラム、2017」¹⁶⁾はどうだろうか。同カリキュラムのPDFファイルを対象として、筆者が言葉の出現状況を調べたところ「タッチ」の出現はなかった。「手」は22回出現したが「受け手、手術、手法、手段、相手」など複合語の構成要素として用いられているのみで「手」単独での使用はなかった。

II 指先で考える、新たなプログラムの概要

1. 改めての開発方針

看護の初学者に手の大切さをどのように教えたら良いかを見出そうとして、看護の分野で適切な文献

を探したが見当たらなかった。そこで今回の基礎力ゼミナールⅠに向けて、特に手の指の触覚の働きに注目し、新たなプログラムを開発することにした。著者は看護の分野での教育は経験に乏しいが、触覚を用いた教育の可能性については公衆衛生学の分野で試行を重ねている¹⁷⁻²¹⁾。著者のこれまでの経験を総合して開発を進めた。

2. なぜ指先の触覚か？

筆者が手の触覚に関心を持ったのは、公衆衛生学の分野で長崎県道路整備員の振動障害（草刈機の振動への過剰曝露が原因で発症する職業病）の健診（1982～84年）に関わってからである¹⁷⁾。同健診で担当した指先の末梢循環や触覚閾値の評価は、自覚症状などと共に振動障害の発見に役立った。

その後、筆者は1992年から「手の触覚を介する生活の認識と学習」に関心を持ち始めた。医学部の学生が障害者の立場を体験的に学ぶ方法として、ゼミ形式での視覚障害体験実習¹⁸⁾を開始したことがきっかけである。アイマスクをかけ視覚を遮断した状態での「移動体験・街歩き体験」に加え、手で様々な物体に触れて考える「触知体験」が学習者の探索的な学習意欲を引き出すことを経験した^{19,20)}。これらの体験実習は2015年まで毎年継続し「触知体験」としては自然物（小石、貝殻、木の実・枝、etc.）や文房具（鉛筆、消しゴム、クリップ、etc.）から生活用品（洗濯バサミ、ソケット、石鹸、衣類、靴、etc.）にいたるまで様々な物体を「触れる教材」として用いた²⁰⁾。日常生活用品として気泡緩衝材（プチプチ）を検討したこともあったが、学習者がプチプチ潰しを始めることが予想され、採用には至らなかった。

転機が訪れたのは2016年である。医学から看護学の領域に移り、看護の教育に関わり始める中で、筆者は「触知体験（物体に触れて考える試み）」を通常の授業で行うことを考え始めた。参加者が数名のゼミであれば、多様な物体に触れて考える設定の準備は容易である。しかし100名を超える学習者が一斉に経験するのであれば、触れる対象物はできるだけ均質で単純な物体を用いる必要がある。触れる対象物の検討を続ける中で、まず「折った紙片、紙コップ」などが候補に上がった。これらは単純な物体であるが、折ったり、置く向きを変えたりすることで、学習者の指先に「段差」「内側と外側」など

空間的な位置関係の問題提起を行える²¹⁾。しかし看護の場合は問題提起を人に向ける必要がある。このような経緯から、かつて一度用いただけで使用を諦めていたプチプチの活用を再考するに至った²²⁾。

3. なぜプチプチか

気泡緩衝材（Bubble Wrap プチプチ）は二人の米国人技術者によって1957年に偶然に発明された²³⁾。緩衝材や包装材としての用途が中心であるが、独特の触感や潰したときに特徴的な音がし、また解放感が得られることから、娯乐的／気分転換的な用い方も広まっている²⁴⁾。

プチプチの特徴はその独特なアフォーダンスにある。アフォーダンスとは米国の心理学者ギブソンが「afford（アフォード）；与える・提供する」という言葉から生み出した造語であり、「環境（そこに存在する物体も含む）が人（知能のある動物も含む）に対して与える意味」を示す²⁵⁾。たとえば「出入口（ドア）」に「取っ手（ノブ）」がついていると、人も猫も、特に説明されなくても、その物体（取っ手）を動かして、出入口を開けようとする。どのような物体でもその形や重さや動きで、何らかのアフォーダンスを示す。プチプチは2層のシートの間に封入された多数の気泡からなる独特な構造・触感を持っており、他の物体にはない独特な行動「プチプチ潰し」をアフォードする。「潰したい」という気持ち・衝動は興味深いものであるが、それを野放しにすると、潰すだけで終わってしまう。しかし潰す手前で立ち止まり、「なぜ潰したいのか」などと問いかけると、そこを出発点として、手で触れることの意味を問題提起することができる²²⁾。このような経緯からプチプチの採用に至った。

4. 触れるプログラムの開発方針

「プチプチを介して触れ方や触れることの意味を考えるプログラム」の開発に際し以下の方針を採用した。

- ・方針1__自分らしい触れ方を探る：「どのように触れるかの技術」を学ぶ（教える）のではなく、自ら触れ方に気づくこと、考えることを重視する。
- ・方針2__物体に触れて考え始める：看護師にとって人の体に触れることが重要であるの言うまでもない。しかし人の体に触れる

ことを前提としてプログラムをデザインすると、前項で言及した「人への不用意／不必要な接触を禁止する文化的背景」に抵触する可能性がある。そこで「人の体からではなく、物体から始める」という方針を採用する。

- ・方針3 __ 講義室で120名の学生が同時に体験できる：一部の学生だけが時間をかけて体験するプログラムは、講義室には向かない。1クラス120名の学生が同時に体験できるプログラムを目指す。
- ・方針4 __ 触れることで自分自身の存在を振り返る：触れることは「触れる自分」と「触られる相手（対象）」の双方が関与する相補的行為である。この相補性の中で自分を意識することを目指す。
- ・方針5 __ 触れることで他者を意識する：前項の相補性をとおして、ここでは相手（他者）を意識することを目指す。
- ・方針6 __ 今後の看護の学習を展望する。

Ⅲ プチプチから考えるナラティブな問題提起の開発

プチプチの特性として、多くの学習者はプチプチを潰す自発的な行動を開始することが予想される。この衝動、エネルギーは大切だが、それに身を任せると看護の学習を展望する視点には到達できない。到達できるようにするために、学習者が絶えず自分の触れ方を意識化し、それを看護と関連づけられるように、学習者に語りかけることが大切である。そのために以下のナラティブ（問いかけ）を開発した。

・導入の問いかけ

「皆さんは、自分の指や手が持つ力に気づいているでしょうか。指でスマートフォンを操作するのは慣れているかもしれませんが、でも皆さんは看護を学ぶ学生です。看護は手から始まるとも言われます。今日は『指先から看護を考える』問題提起を行います。」

・1番目の問いかけ；出発点としての Haptic Gance

「出発点は自分の手の感覚です。これから単純な物体を配付します。しばらく目を閉じ、手の平で配付物を受止めてください。私たち人間は『Haptic

Glance; 手を触れるだけで身の回りのものを瞬時に認識できる能力』を持っています。Haptic Glanceの能力を用い、あなたの手がいま触れた物は何か、どう感じるか、言い表してください。」

・2番目の問いかけ；自己の分析1；欲求の理論化

「プチプチだと分かたら、目を開けてください。皆さんの中には『プチプチを潰したい』という気持ちを感じた人が多いと思います。その気持ち・欲求はどこから来たのでしょうか。考えてください。私たち人間の中にある様々な欲求（ニーズ・必要性・衝動）を米国の心理学者マズローは、三角形の形に整理し理論化しました。患者さんの欲求に向き合うのは看護師の重要な役割です。その出発点は、自分自身の様々な欲求に気づき、それを理論化してみることです。」

・3番目の問いかけ；自己の分析2；指先からの数量化

「プチプチを潰す時に指先にどのくらいの力をかけたでしょうか。まずどちらかの手の人差し指を、もう一方の手の親指と中指で挟んでください。どのくらいの力で挟んでいるか、意識してください。自分の指で力の強さを意識したら、今度は隣の人の指先にも触れて、力の強さを確認してください。さて『この、今、はさんでいる力』に比較して先ほど『プチプチを潰していたときの力』はどのくらい強かったですでしょうか。何倍くらいでしょうか。力の違いや変化をグラフに描いたら、どうなるでしょうか。今行っているのは数量的・実験的な発想です。実験的な発想は皆さんが将来看護師になり、患者さんの手に触れ、脈拍を診たり、採血をしたりするときの力の入れ方を考える上でも、とても大切です。」

・4番目の問いかけ；自己の分析3；内省と観察

「『プチプチを潰すことでストレスが解消できる』との研究結果があります。自分自身を一事例として、気持ちの変化を内省・観察し、何が起きているのかを調べてみます。潰す前の気持ちの観察も重要です。なぜプチプチを見ると、手を触れると『潰したい』と思うのでしょうか。フワフワ、プツプツとした状態に『不確かさ・不安』を感じるのでしょうか。そしてその次、潰す瞬間に感じる気持ちは何でしょうか。『安心感』『解放感』でしょうか。最後にプチプチが潰れ、空気が抜けた後の『抜け殻』に感じる気持ちは何でしょうか。

皆さんが将来、看護師として出会う様々な医療行

為は、その前後に様々な感情を呼び起こすことが考えられます。何らかのケアについて『ケア前・ケア中・ケア後』の変化はどうでしょうか。たとえば採血について『採血前・採血中・採血後』にはどのような感情が現れるでしょうか。」

・5番目の問いかけ；他者の意識化1；生命を感じる

「今度はプチプチを一つの生命と考えてみてください。プチプチが一匹の蚊だとしたら、皆さんはパチンと潰すでしょう。ではプチプチが私たちと同じ生き物、小さな命と考えたらどうでしょうか。潰せなくなるかもしれません。ではこの『潰せない』という気持ちは何でしょうか。ドイツの哲学者でありアフリカで医師として活躍したシュヴァイツァーは、命に大切さや恐れを感じる感覚のことを『生命の畏敬 Reverence for Life』と呼びました。これは赤十字が大切にする『人道 Humanity』にも通じる考え方です。」

・6番目の問いかけ；他者の意識化2；個性を感じる

「もしプチプチを『大切な生命、存在』と考えられるなら、さらに一歩プチプチに近づいてみます。プチプチの気持ちまで感じられるでしょうか。あなたもプチプチの一つになって、隣のプチプチに話しかけたらどうなるでしょうか。プチプチは答えてくれるでしょうか。」

・7番目の問いかけ；他者の意識化3；人々に向き合う

「最後は皆さんの手のひらの上にあるプチプチシートを、人の集まり、人々・集団だと考えてみます。シートにはプチプチがいくつ並んでいるでしょうか。最初は、潰れていない元気なプチプチが50個くらいはあったと思います。手のひらの上にある50個のプチプチを、皆さんが将来看護師として勤務する病棟の患者さんたちだとイメージしてみてください。皆さんは50人のうち、何人くらいを受け持つことになるでしょうか。張り切って元気な人と、しぼんで元気がない人とは、どのくらいの割合でしょうか。」

・まとめ

「看護師は、ナイチンゲール以来、医師よりも、もっとも指や手の働きに関心を持ち、様々な理論も開発してきました。今日の私の問題提起は『指先で考える』でしたが、看護の分野では、指先や手で

人を癒す研究や実践も行われています。皆さんもぜひスマートフォンに触れるだけではなく、自分の手の感覚を探検してください。ではこれで今日の問題提起を終わります。」

Ⅳ 授業の実施状況

1. 触知した物体

2019年6月14日、基礎力総合ゼミナールⅠの時間に気泡緩衝材を用いて問題提起を行った。採用したのは川上産業製プチプチ（エアークッション）、材質ポリエチレン、一個のプチの大きさは直径10mm、粒高3.5mmである。授業で用いる場合、潰しやすさが過ぎると学習者に「潰したい衝動」が強く誘発され、授業が円滑に進まないことが危惧された。そこで今回の試行では、潰すのに比較的力を要する「重梱包用d40」を採用した。幅400mm、長さ42mのロールを購入し、縦横80mmの四角形に切り分けたものを一人分のプチプチシートとして、学習者の人数分を用意した。

2. 授業の位置付けと記録の取り方

筆者がこの40年来に行った公衆衛生学を中心とする授業では、過去の授業の反省に基づいて毎回何らかの試行・改善を行うことを常としている。今回の基礎力総合ゼミナール授業では、授業の2週間前までは、シラバスの記載に従い昨年と同様に、質問紙によって大切さを問いかけた上で交流する参加型の問題提起を予定していた。しかし授業準備を重ねる中で、これまでよりも学習者が能動的に学び得る授業方法が求められていることが感じられたため、開発を進めてきた「プチプチを用いる問題提起」を用いることを急遽決定した。行ったのは通常の授業である。事前に詳細な計画を立て、審査を受けた上で行う学術的研究ではない。質問票配付や発言録音など学術的研究であれば当然のデータ収集は行っていない。しかし授業改善のために受講者の受け止め方を知ることは重要である。そこで授業後に「もし差支えがなければ、今後の授業改善のため、授業中に各自が書き込んだワークシートの内容を見せて欲しい」と授業者（筆者）から学習者に提案した。提案に応じほぼ30名の受講者がワークシートを提出してくれた。筆者は提出されたワークシートを閲覧し、個人情報除外した上で主要な記述内容をメモ用紙に書き留めた。閲覧を終えたワークシートは翌

週、各学習者に返却した。

3. 倫理的配慮

看護学教育における倫理指針²⁶⁾に基づき「・教授すべき知識内容を精選する、・学習者のレディネスを十分に配慮した教授方法を工夫する、・学習者の能動性を高める工夫がのぞまれる」などに配慮してプチプチを用いた授業を行った。個人情報に十分配慮した上で、授業で得た学習者の意見は授業改善に活かすことを説明し、参加的に授業を進めた。

V 学習者の反応

以下に示すのは、授業での各問いかけに対する学習者の記述から、筆者が印象深いと判断したもの(各7名分)をメモに基づいて書き起こしたものである。

1. 出発点としての触知体験

Q (問いかけ)：目を閉じて物体に触れて、すぐに何を感じましたか。

「すぐに、1秒もせずに、プチプチだとわかった」
「触った瞬間にプチプチってわかった。つぶしたい。つるつるほこほこ。」
「手の感覚神経で感知して“あっこれ触ったことある!!”、潰したいという信号が脳から出てきた」
「プニプニしているな、プチプチを潰したいな、ビニール」
「空気の入ったブツブツ、つぶしたら楽しそう」
「プニプニしている、ポツポツしている、プチプチつぶしたい」
「四角い、凹凸があるなー。プチプチ」

2. プチプチへの気持ちや衝動はどこから生まれるか？

Q：あなたが「プチプチを潰したい」という衝動・欲求を感じたのはなぜですか。その衝動や欲求の起源は何ですか？

「以前に触ったことがあるものを思い『潰すと音が鳴って楽しい』という理解があったから。脳からきてる。」
「昔、つぶして遊んでいた懐かしの気持ちから。・ストレス解消したい→感触を楽しみたい、音を楽しみたい」
「快感を得たいから。昔からプチプチがあったら潰すくせがあり、何も考えずにつぶそうという考えの前に潰していた」
「触れることで『潰したい』と脳から伝導を受ける、潰すことで快楽を得たいと

無意識に感じてる」
「潰したい衝動より、包みたい衝動にかられた。私はプチプチを見て潰したいとは思わない。他の人のその気持ちがあまり分からない。」
「以前つぶしたことがある感覚を思い出したから、好奇心から」
「昔から物を包むのが好きだった、紙よりプチプチの方が包みやすかったから」

3. プチプチと指先、触れる力の数量化

Q：指先にどれくらい力をかけたか、分析してください。

「人の指や自分の指はつまむ程度だけど、プチプチを潰すときは指先に力をすごい入れている、プチプチは痛みを感じないので強く」
「手の人差し指をもう一つの手の親指と中指を挟む力より、プチプチを潰す方が3～4倍くらい力強く潰した」
「物によって力の入れ方が違う。プチプチだったら全ての力を入れるくらい力を入れるけど、人の場合は包み込むような軽い力を入れた」
「プチプチを潰すときと、他の人の指をはさむときと、頭で考えずに、力を変えているんだと分かった」
「他の人の指を握るときは『痛い』という感情があるからあんまり押せないし、他の人がどれだけ痛みを感じているかわからないから、力加減が難しい」
「プチプチはつぶそうと思って触っているから強く握るけど、手はつぶそうとしないから弱めに握った」
「自分にするときには、力の加減が分かるが、潰したりするときには、力の加減が分らなかった」

4. プチプチを潰す過程と気持ちの変化

Q：プチプチを潰す過程を内省・観察してください。

「つぶす前の気持ち→うにうにしている気持ち良い、けど、つぶしたい。つぶすと・・・→スッキリする。つぶした後に触れる→ちゃんとつぶれていると分かる。」
「前・ワクワク→あーつぶしちゃいたい。中・全然つぶれんやんけ。または→イエイ！つぶれた！！。後・虚無感、ゴミやな。」
「前；あー早くつぶしたいっ、てなる。瞬間；早く次をつぶしたいって気持ち、つぶしたらまだつぶしたいってなる。後；フーってなる、残念、あーあ。」
「潰す前；早く潰したい。潰すとき；潰れなくて少しイライラ。潰した後；

あーつぶれた。指先少し痛いけど快感。潰れたプチプチを触ると、あーなくなった、もう一個つぶしたいな」「つぶす前；つぶしたい！力がもう少し必要。つぶした瞬間；片手ではつぶれない。うれしい。ぬけがらをみて；つぶれちゃった・・・残念な気持ち」「つぶす前→柔らかいから、つぶす前に、こねくり回したくなる。つぶした瞬間→うまくつぶれた。しかし、音が鳴らなければストレスになる」「私は別に潰したいという気持ちが無かったので、気持ちの変化はあまりなかった。」

5. プチプチを命と考えた際の向き合い方の変化

Q：プチプチを生命と考えたときの、気持ちの変化を分析してください。

「これが一つの命だと思ったら、押すのが難しくなった。これが心臓で戻って来るなら押したいと思うが、生命だったら押したくはない。」「その、生命を感じるプチプチだけ特別にみえて、つぶしたいという感情はなくなった。名前をつけたくなくなった」「緩衝材の一つを命と考える→つぶしたい気持ちが多少薄れたけど、つぶせる。緩衝材の目線で・・・→つぶされるのは自分の役割じゃない」「命と考えると『重いものだな』とか『潰せないな』という気持ちになる。死につながるから潰せない。潰したら、もう戻らない」「つぶしたくない。やさしく扱いたい。つぶしてしまったら・・・→すごく申し訳ない気持ち。寂しい、悲しい、罪悪感」「つぶすことができない、戻らないから。プチプチからすると『つぶしてほしくない』」「生物と思ったら、つぶせなくなって、愛でる。名前つけたくなる」

6. プチプチの個性と語り

Q：プチプチに話しかけると想像してください。プチプチは応えてくれますか。

「えーっ、つぶさないでー。満員電車で押しつぶされているような気持ち。苦しい／異物を出してほしい」「触らないで、潰さないで、早く空気に触りたいから潰してほしい」「私はプチプチの気持ちになると『潰せない』と思っていたが、他の人達は『潰して欲しい』とっていて、感じ方の違いがあると思った」「つぶされているもの、つぶされていないものがあり、人にも

個人差があるのと同じなのかなと思った」「怖い。つぶさないで。死んじゃう。物事が起こるともう元には戻らない」「生きたい。つぶされず、ふくらんだ、ありのままの美しい姿でいたい」「ぶちぶち全てを自分の病院の患者さんだと考えたら、誰もつぶせないと思った、つぶしてほしくない」

7. プチプチ・シートを病棟と考える

Q：プチプチ・シートを病棟と仮定したら、何を感じますか。

「プチプチを人として、8cm四方に50人いるとすると、限りある範囲であるが、互いに影響する力は大きいと思った」「つぶつぶは一回潰れると再生することは難しいけど、患者の場合なら、元気づけたりすることができるので、自分の手で正しい看護をして行こうと思いました」「50人の患者とみたとき、個々のニーズに合った触れ方をすべきだと思った」「プチプチの50個を人の命に代えて考えることは、難しかった」「小さいプチプチだけど、人と考えると、はかない物だなと思った」「指先ひとつで誰かを幸福へと導ける」「プチプチは、押しほしくないと思う。これは割れ物を包むものとして機能しているから」

8. プチプチで学べること

Q：プチプチで学べることをまとめてください。

「このプチプチ一つで色々なことが考えられるのだなと思った。命があると思うと潰せなくなった。考えだけでこんなにも変わるのかと思った」「自分の知識と能力と考え方を看護師という仕事をする中で生かしていく。指先だけで人を癒したり殺してしまったりできるというのは怖いし、すごいと思った。置き換えて考えるということは普段そんなにしないので、自分もこの考え方を忘れずに考えていこうと思いました」「緩衝材を使っただけの説明や例えは、変わっているけれど、わかりやすかった。今回は強さが取り上げられていたけれど、指先から得る情報は改めて考えると多いとわかった。つぶすと言われていているのにつぶす人は、理性や我慢といったものが欠けているのかなと感じた」「生命があるかないかで、気持ちが変わってし

まう。人の心は複雑と思った。プチプチで考えさせられることがあるとは、思わなかった。」「これを、プチプチと思ったら、一気につぶせなくなったから、物事も考え方次第なんだなと思いました」「プチプチ一つ潰すのに、今まで何も考えずにやっていた行為だけれど、いざ授業を受けてプチプチを潰すと重いものがあるなど感じた。自分は潰して快感を得たいけど、プチプチの気持ちになると潰しづらい。命に置き換えると、ぷちぷちに触っているだけでも少し嫌になった。指先で色々な物を感じ取ることができると、患者さんに癒しを与えることもできるんだと改めて実感する授業でした」「物を人の命に代えて考えることは難しかった。指先1つで看護の力を考えることができて、驚いた」

VI 考察

看護師にとって「手、タッチ」が重要だというとき、そこで表現される「手、タッチ」は、本稿で問題とした「指で触れて考える」基本的な「手、タッチ」ではなく、看護師としての職業的なタッチを意味する場合が多い。すでに人格的にも技術的にも成熟した看護師・医療者が、自分の手を用いて、患者とコミュニケーションを取ったり、癒したり、診断したりするための「手、タッチ」はもちろん重要である。そうしたタッチ、職業的なタッチは既に確立されており、その意味が、改めて看護者自身に対して問われる機会は、それほど多くないと考えられる。しかしスマートフォンにタッチする経験は豊富でも、それ以外のタッチの経験が少ない看護の初学者に「触れることの意味」を自分で発見してもらうことは重要である。そうした自発的な学習を目指して本授業試行を行った。

“目で見える”、“手で触れる”などの行為を私達は特に意識せずに、新生児の時代から行っている。こうした当たり前の行為の意味を改めて問うことは、普通は行わない。しかし医療や看護は、当たり前の行為ができなくなる状況にも対応しなければならない。かつて筆者は「目が見えなくなることの意味」を医学生に問題提起する必要がある、自ら視覚障害体験を行った上で「見える／見えない」の意味を学ぶワークブックを試作した¹⁸⁾。今回は対象者が医学生から看護学生へと、また課題が視覚的「見える

／見えない」から触覚的「触れる／触れない」へと変化した。視覚的課題は（晴眼者においては）アイマスクで目を覆うだけで問題提起できる¹⁸⁾。他方、触覚的課題は視覚的課題に比較してアプローチが難しい。視覚が視覚器（目）に特化した感覚であるのに対し、触覚は体性感覚とも表現されるように受容器が全身の皮膚に分布する根源的な感覚であり、「触れる／触れない」を明確に区分／体験するのが困難だからである²⁰⁾。この難しい課題に、今回アプローチできたのは、プチプチという特徴的なアフォーダンスを持つ物体に出会えたことが大きく寄与している。

本授業試行では3番目の問いかけ（プチプチと指先、触れる力の数量化）の一部で、隣の学習者の指先に触れる機会があったが、それ以外の問いかけでは、学習者は自分なりの触れ方で物体プチプチに触れ続けた。この条件設定「物体にのみ触れる、他者の手や指には殆ど触れない」を常識的に受止めるなら「物体が対象で『看護師の手』を問題提起できるのか？」との危惧が生まれる。しかし物体プチプチは人間の中にある「潰したい」との衝動を誘発する稀有な物体であった。そのために学習者はプチプチに触れることで、通常は心の奥に潜んでいる衝動について、それを認識・考察する入り口に立つことができた。触れた瞬間にプチプチ潰しを誘発することは、以前から知られていた。しかし本試行では「つぶす行為→ストレス解消」という定型的な道筋を取らず、新たな問題提起を採用した。その結果「プチプチ潰しを起点として自分を振り返る」ことが可能になり、「自分の心の内奥にある衝動」が意識化され、「自分と他者との関連性」から「看護の意味」に至るまでの問題提起が可能になった。たとえ物体ではなく人体に触れる実習を時間をかけて行ったとしても、そこでの経験から、学習者が、自分の心の中にある衝動や葛藤までを意識することは、通常は考えられない。なぜプチプチという物体から、衝動や葛藤までを意識化できたのだろうか。プチプチという物体の「アフォーダンス」と、学習者が本来持つ「表象能力 symbolic ability; 何かを別な何かとみなす能力」²⁷⁾との双方が寄与した結果と考えられる。

冒頭に述べたごとく、本試行は「ひとりを看る手、その手を世界へ」の現実化をめざして行われた。さて、この目標は達成されたのだろうか。「その目を世界へ」の場合は、赤十字国際活動のスライドを

講義室で見ただけでも、学習者はある程度は世界に目を向けることができる。他方、手は物理的には数十センチの範囲にしか届かない。さらに今回、講義室で学習者が触れたのは手のひら上の小さな物体プチプチである。プチプチを潰した際の指の動きは数ミリメートルであった。しかし、その僅かな動きから学習者は自分の衝動に気づき、生命の大切さや看護の意味までを考え始めた。内的な世界に一步踏み込めた事実を考慮すると「その手を世界へ」の目標は達成されたとと言える。

謝辞

本授業試行は、日本赤十字九州国際看護大学の初年次科目、基礎力総合ゼミナール I での問題提起の結果をまとめたものです。高瀬文広、柳井圭子、力武由美、大重育美、倉岡有美子、石飛マリコ、原田紀美枝、西山陽子、木村涼平の各先生方のご協力で、新たな問題提起を行うことができました。また鎌田幹夫氏（株式会社 ACORDO）には知覚としての触覚の意味についてご助言をいただきました。記して御礼申し上げます。最後になりましたが、プチプチによる問題提起を受入れ、率直な感想を教えてくださいました学生の皆様に深謝申し上げます。

文献

- 1) Mead, M. : Nursing-primitive and civilized. In: *The Nature of Nursing*. 1956, 稲田八重子, 他訳：看護－原初の姿と現代の姿. 「総合看護」編集部（編）看護の本質 新版, 看護学翻訳論文集. 1-10, 東京, 現代社, 1996.
- 2) 川嶋みどり：今だからこそ看護師の手の有用性を - 癒し、慰め、励ます手の価値 - . 日本看護協会「看護職賠償責任保険制度」第5回特別講演会, 1-4, 2008. https://li.nurse.or.jp/news/public_download/255/51.pdf, (参照 2019-08-10).
- 3) Nightingale, F. : *Notes on Nursing: what it is, and what it is not*. London, Harrison and sons, 1859.
- 4) Schweisheimer, W.: The hands of the nurse. *Nursing Mirror and Midwives Journal*, 82: 203, 1945.
- 5) Hayward, D.S. : Using the tools at hand. *The American Journal of Nursing*, 52(2): 204, 1952.
- 6) Seide, D.: With black bag in hand. *The American Journal of Nursing*, 53(6): 730-1, 1953.
- 7) Collins, J. W.: Volunteers give the human touch in admitting. *Hospitals*, 28(12):75-7,1954.
- 8) 藤野彰子：看護とタッチに関する研究動向—1970年代～1990年代まで—。教育学研究室紀要〈教育とジェンダー〉研究, 創刊号：19-34, 1998.
- 9) Routasalo, P.: Physical touch in nursing studies: a literature review. *Journal of Advanced Nursing*, 30 (4): 843-850, 1999.
- 10) Taylor, C., Lillis, C., Lynn, P., et al.: *Fundamentals of Nursing : The Art and Science of Person-Centered Nursing Care* (8th ed.). Wolters Kluwer, 2015.
- 11) Dossey, B.M., Keegan, L., Guzzetta, C. E. (Eds.): *Holistic Nursing: A Handbook for Practice* (4th ed.). Sudbury, MA, Jones and Bartlett Publishers, 2005.
- 12) 岡崎美智子：看護教育における臨床実習の指導方法に関する実証的研究—タッチングの指導を中心として—。日本看護科学会誌, 17 (2): 69-78, 1997.
- 13) 五十嵐透子：看護におけるタッチング教育。日本精神保健看護学会誌, 9 (1) : 1-13, 2000.
- 14) 近藤誓子, 佐藤尚子：『触れる—触れられる』体験がもたらす看護学生の主観的反応。看護学研究紀要, 4 (1) : 21-29, 2016.
- 15) 高等教育局医学教育課. “大学における看護実践能力の育成の充実に向けて.” 文部科学省. 2002. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm, (参照 2019-08-10).
- 16) 高等教育局医学教育課. “大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：看護学教育モデル・コア・カリキュラム.” 文部科学省. 2017. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/index.htm, (参照 2019-08-10).
- 17) 守山正樹, 兜真徳, 他：草刈機使用者の健康管理についての縦断的研究。昭和60年度日本産業衛生学会九州地方会抄録集, 1985.
- 18) 守山正樹, 福岡大学医学部公衆衛生学教室グループ：初めての視覚障害体験。福岡, 福岡大学医学部公衆衛生学教室, 2003. <http://hdl>.

handle.net/20.500.12001/11081

- 19) 守山正樹, 永幡幸司, 山田信也, 他: 視覚障害の有無にかかわらず使用できる、触覚を用いた生活認識と健康教育の方法. 日本眼科紀要, 58 (3): 146-152, 2007.
- 20) 守山正樹: 触覚・体性感覚による私たちの周囲の世界の可視化と意識化. 理学療法, 29 (1): 73-88, 2012.
- 21) 守山正樹, 伊藤恵子, 鎌田幹夫, 他: 触覚から生活や感情を振り返るリフレクションの演習方法の開発と試行. 感性と対話, 1 (2): 7-22, 2018. <http://id.nii.ac.jp/1127/00000550/>
- 22) 守山正樹: 人と社会に関するいくつかの概念を手で触覚的に学ぶ方法の開発. 感性と対話, 2 (1): 7-23, 2019. <http://id.nii.ac.jp/1127/00000569/>
- 23) Green, J., Nyberg, T.: *The Bubble Wrap Book*. New York, Harper Perennial, 1998.
- 24) Barron, J. "Celebrating half a century of loud, soothing pops." *The New York Times*, January 25, 2010. <https://cityroom.blogs.nytimes.com/2010/01/25/celebrating-half-a-century-of-loud-soothing-pops/>, (参照 2019-08-10).
- 25) Gibson, J. J.: *The Theory of Affordances* (1979). In: Giesecking, J. J., Mangold, W., Katz, C., et al.: *The people, place and space reader*. 61-64, New York, Routledge, 2014.
- 26) 看護学教育研究倫理検討委員会: "看護学教育における倫理指針." 日本看護系大学協議会. 2008. <http://www.janpu.or.jp/umin/kenkai/rinrishishin08.pdf>, (参照 2019-08-10).
- 27) Shaffer, D. R., Kipp, K.: *Developmental Psychology: Childhood and Adolescence* (8th ed.). Wadsworth, 2010.

Report

Let's discover meanings of touch from our fingertip and start to think about nursing and humanity!; a new educational program using bubble wrap

MORIYAMA Masaki, MD, PhD.¹⁾ SUZUKI Seiji, D.Lit.,¹⁾

Hands are important for nurses, and touch is positioned as a basic nursing technique. However, before going rush to educate technical touch, how should we guide novice nursing students to notice and discover hidden ability of their tactile sense and meaning of touch?

I searched domestic and foreign literature on this point, but I did not find any appropriate literature. Therefore, I developed a new program “Let's discover meanings of touch from our fingertip and start to think about nursing and humanity!” .

The prototype of development is “Let's touch objects around us and reflect about our daily life” , a program included in the visual-impairment-experience that the author has continued for a group of medical students since the 1990s. In this program, students touch various objects (from complex daily objects to human hands/skins) and think/reflect. However, this small group setting was difficult to apply to a class of 120 students. To perform the touching program in a large class, it is necessary to renew both the touching object and the touching protocol. What are the objects that can be touched without getting bored and think about various issues? Is it possible for students to extend their thinking from ones' fingertips to the concept of humanity and nursing?

As the result of trials and errors, I decided to use the bubble wrap (nickname “Putiputi” in Japan) as the object of touch. Bubble wrap has unique affordance, and usually when I give bubble wrap to students, they begin to pop it immediately. At the same time, however, when I ask questions such as “why do you pop/crush?” or “how do you feel when you think it is a living creature?”, the students begins to reflect what they did and start to think more deeply. In this way, I developed a new educational program of touching bubble wrap and think / reflect various dimensions of humanity & nursing under the guidance of narrative inquiries.

In June 2019, I implemented the program for 120 students. Students accepted bubble wrap (Putiputi) as an educational material and were able to develop their thinking autonomously from “meaning of touch” to “nursing and humanity”.

Key words: nursing, novice education, touch, bubble wrap, tactile sense.

1) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing